

3 花 き

項 目	作 業 内 容
<p>(1) 露地花きの湿害対策</p> <p>(2) 施設花きの病害・生理障害防止対策</p> <p>(3) シンテッポウユリの露地栽培管理と収穫</p>	<p>(今月の作業のポイント)</p> <p>露地花きの湿害対策</p> <p>施設花きの病害・生理障害防止対策</p> <p>シンテッポウユリの露地栽培管理と収穫</p> <p>シクラメンの施肥管理</p> <p>ポットハボタンの育苗</p> <p>3か月予報によれば、7月は平年に比べ晴れの日が多く、気温は高い確率50%で、降水量は平年並または少ない確率ともに40%となっている(6月23日高松地方気象台発表)。</p> <p>露地栽培では、梅雨期の高温多湿により病害が発生しやすくなるので予防散布を徹底する。さらに、梅雨後半には前線活動が活発になり大雨や局地的な集中豪雨が起こりやすくなるので、排水溝の確認や再整備により排水能力を高めておく。</p> <p>また、降水量が多くなると土壤中の肥料が流亡するので、追肥を行うとともに軽く中耕することで土壤中に酸素を供給する。なお、日中のしおれが回復しないなど根の傷みがひどい場合は、薄い液肥を葉面散布し、草勢が回復してから追肥を行う。</p> <p>施設栽培も同様に梅雨期の高温多湿により、灰色かび病やべと病等の病害が多発、蔓延しやすくなるので、送風や換気により湿度低下に努め、雨の止み間の防除を心がける。</p> <p>また、トルコギキョウやバラなどでは、曇、雨天が続いたあとの晴れ間や梅雨明けの強い夏の日射しにより、葉や花弁の焼け症が発生しやすくなるので、必ず寒冷紗等で遮光管理し、植物体自身の昇温と過度の蒸散を抑える。</p> <p>7月中旬頃からは早生系品種の収穫期となるが、採花は晴天日には早朝より開始し、朝8時ごろまでに終了させることが望ましい。高温期となる</p> <div data-bbox="831 1541 1388 1935" data-label="Image"> </div> <p>写真1 収穫間際のシンテッポウユリ</p>

項 目	作 業 内 容
(4) シクラメンの施肥管理	<p>ので、日中の採花では長時間切り花を放置すると花卉に焼け症が発生する場合がありますので注意する。収穫物は直射日光にさらさないように収穫クロスなどに包み、できるだけ早く水あげし、屋内で調製した後に冷蔵庫内で保管する。切り前は時期や出荷市場によって若干異なるが、高温期のこの時期は、開花4～5日前で蕾が白味を帯びる前の緑が残る状態が採花適期となる。</p> <p>なお、シンテッポウユリは実生苗による栽培が前提となるため、他のユリに比べ生育にばらつきが生じ採花期間も長くなるので、その間も葉枯病の防除は徹底する。</p> <p>7月はシクラメンの花芽形成期であるが、肥料濃度が高すぎると花芽の誘導が遅れる原因となる。したがって、肥培管理は7月下旬より液肥(窒素:リン酸:カリ=1:1:1)を窒素濃度で30ppmに落とし、葉色に注意しながらやや生育を抑え気味に管理する。ただし、リン酸とカリについては十分に与える必要があるため、その含有比率の高い置き肥を施用することで補う。さらに、夏場はカルシウム欠乏が出やすいため、カルシウム剤を2週間間隔で10月頃まで継続して散布する。</p> <p>また、11～12月に開花する花の花芽分化は7～8月に完了するが、マッチ棒の大きさ以上に発達した花芽では25以上の高温で伸長抑制や生育阻害が起こりやすいため、晴天時には50～70%の遮光資材を展張し、換気も十分に行うことで施設内の昇温防止に努める。遮光による照度不足は葉や葉柄が軟弱になるので、鉢の間隔を広げ受光面積を確保し風通しをよくする。</p>
(5) ポットハボタンの育苗	<p>年末出荷は、7月中旬～8月上旬には種を行う。は種が遅れると十分な葉数を確保できなくなるので注意する。</p> <p>は種容器は200穴のセルトレイを用いる。ハボタンの発芽適温は25程度であり、は種後の容器を直射日光にさらすと発芽が抑制され不ぞろいになるので黒寒冷紗などで遮光する。発芽揃い後は、徒長防止のため遮光を中止する。</p> <p>また、高温期は胚軸が伸びやすく腰高の苗になりやすいので、子葉が展開した時期(は種5日後頃)にわい化剤を処理する。</p> <p>ポット上げの適期は、は種後20～30日(本葉2、3枚頃)を目安とし、それまでは週1回程度液肥を施用する。</p>

(作成 農林水産研究所)